

〈 礼拝説教 〉 2010年 10月 10日

持っている？

持っていない？

申命記 23章 20～21節

マタイによる福音書 25章 24～30節

武田真治

一、イエス様の譬えの秘密

イエス様が語られた、たくさんの譬え話は、人々に福音をよりよく伝える為に日常的に卑近な例を用いられて分かりやすく語られている半面、もう一方で物事の核心を露わにする為にわざと誇張されて語られる場合もあります。それ故時々、なぜこのようなことを言われるのか？とか、ここに何の意味が込められているのか？といぶかしく思ってしまう箇所もあります。それは、むしろイエス様がそこで立ち止まって考えてほしいと思われている箇所だと言えます。その意味で決してイエス様の譬え話は、すっきりはしていません。むしろ節くれだっており、ところどころにトゲがあると云った方が良いのではないかと思えます。その節くれやトゲに私たちの心や魂が引っ掛かって来るのです。この有名な「タラントンの譬え」もその意味では、たくさんの節くれ、トゲを持っています。

例えば、この譬えでは「一人には五タラントン、一人には二タラントン、もう一人には一タラントを預けて旅に出かけた」とありますが、なぜ平等に同額のタラントンを配らないのか？と思ってしまう。

このタラントンが現代のタレントと通じるという解釈から言えば、まさに人各々に才能が分け隔てされて与えられているということを肯定していることにならないでしょうか？みんなが平等に神の恵みを与えられているということではないのか？と。

勿論、イエス様はそのような反論が起こることも十分に承知であったようで、だからこそ最後の主人が帰って来た時の清算（神様の前での人生の決算）の時には、各自が得た金額を問題には為さらず、むしろ各自に与えられたタラントんに応じて、与えられたものに対して何パーセント用いたか？を問題にされています。

それ故、五タラントンを元手にして五タラントン儲けた者も、二タラントンを元手にして二タラントン儲けた者も、両方に全く同じ言葉で「忠実な良い僕だ。よくやった」と誉められています。それは、この世の中の評価のように儲けた量や金額で決めつけられるの

ではなく、神様の評価はどれだけ与えられたものに忠実であるかであることを示して下さっています。そこには差別はないのです。このように、どうして？と思わせることを通して、逆に大事なメッセージを伝えようとされる点に、イエス様の為さる譬え話の秘密があります。

二、一タラントンの男の「思い」

ただし、この「タラントンの譬え」に潜んでいるトゲは実はまだあります。それは一タラントン預かった者の態度とそれに対する主人の決済についてです。

即ち「ところで一タラントン預かった者も進み出て言った。『御主人様、あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方だと知っていましたので、恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントンを地の中に隠しておきました。ご覧ください。これがあなたのお金です。』主人は答えた。『怠け者の悪い僕だ。わたしが蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集めることを知っていたのか。それなら、わたしの金を銀行に入れておくべきであった。そうしておけば、帰って来たとき、利息付きで返してもらえたのに。さあ、そのタラントンをこの男から取り上げて』」です。イエス様は、なぜこの人も前の二人と同じようにタラントンを得たというお話になさらなかったのか？それならメデタシ、メデタシで終わったのだと思います。しかし、敢えてこのように語られている所に、大事なイエス様のメッセージが含まれていると言えるのです。

ある解説者は、この一タラントンを預かった人の行動について以下のように推測しています。即ち、彼がタラントンを「地の中に隠した」理由は、主人が恐ろしかっただけでなく、自分には一タラントンしか預けなかった主人への反抗の意味も含まれているのではないかと。

確かに、この主人はタラントンを分ける時に「それぞれの力に応じて」（十五節）預けています。ということは、この三番目の僕に対しては一タラントンの力しかないと判断しているということになります。

彼にすれば、主人から、こいつは失敗しそうだからたくさん預けられないと考えられていると思えたのでしょう。そして、主人が自分のことをその程度の評価しかしていないなら、その主人の願いに一生懸命に答えなくても良いではないか？むしろ失敗したら、それ

こそ主人の評価の通りになってしまう。それならば与えられたものをそのまま返した方が安全だと考えたのではないかと言えます。そこには、主人のやり方に対する反抗心、すねているような思いが隠れているように思えます。

どうでしょうか？

私たちがこの「タラントンの譬え」を読む時、自分はこの三人のうち誰と同じだろうと考えますとやはり三番目の一タラントンしかもらえなかった人と同一視します。自分には、他の人のように、神様からたくさんの有り余るほどの才能や恵みを与えられているとは思えないからです。

しかし、もともと「一タラントン」とは一人の労働者が二〇年間働き続けて得られるお金の額だと言われています。そうすると現代のお金で言えば、年収の平均を五〇〇万円としても、その二〇倍ですから一億円ということになります。決して少額という訳ではありません。五タラントン預かった人と比べれば少ないと思えるかもしれませんが、「一タラントン預けられた」という事は、いかに豊かなものを神様から私たちひとりひとりが預けられているかを示す言葉だと言えるのではないのでしょうか？与えられていることに満足できる金額でした。感謝して用いることもできたはずでした。

私は思います。そしてもし、その預けられた一タラントンを元手に商売をして、たとえ失敗したとしても、この主人はそれほど厳しく叱りつけはしなかったのではないかと。こいつに預けた俺が悪かったと思うだけだったのではないかと。

この主人が神様を表すとするなら、尚更その最後の決算の時「一生懸命やったのですが、あなたに満足してもらえないような成果を上げることが出来ませんでした。赦してください」と申し上げるしかない私たちに対して「不屈きな僕よ」と裁かれることはない。むしろ「お前なりにがんばったことは分るよ、御苦労さま」と慰めて頂けるのではないかと信じています。

なぜなら、この一タラントンを隠しておいたことに対して、主人の怒りは「怠け者の悪い僕だ」と言われているからです。何もしなかったということが問題になっています。「それなら、わたしの金を銀行に入れておくべきであった」という言葉は、真剣にこのお金をどうしようかと考えたなら、銀行に預けるということぐらひは考え付いたはずだという意

味です。なんとかしたいという「思い」を感じられないことに対して「怠惰だ」と指摘されているのです。逆にその一タラントンのお金の増減は、一切問題にされていないのです。

三、神様、あなたが悪い！

結局、この男の言葉『御主人様、あなたが厳しい方だと知っていましたので、恐ろしくなり、あなたのタラントンを地の中に隠しておきました』は、主人が恐いから、私はお金を地に隠したと言っていることになります。それは、自分がこのような行動に出たのは、あなたが私を恐がらせていたからこうなったと。つまり、責任はあなたにあると言っているのです。それ故、与えられたタラントンまで「隠した」と。ここが問題であるように私には思えます。

私たちの「思い」の中にも、こんな自分にしたのは神が悪い！もっと自分に才能や財産、恵まれた環境やチャンスを与えてくれていたら、こんな自分にはならなかったのに！というように神様を怨みに思う気持ちがあることは事実です。そして、神様を怨むことになっても仕方がない状況というものはあると思います。しかし問題は、それを理由に「何もしない」という点ではないでしょうか？責任を神様に転嫁して、自分は何もしないでいるばかりか、神様から与えられている恵みや課題に対して、見てみない振り、あたかもそのような物は与えられていないかのように「地に隠す」ことが問われているのです。

神様から与えられているものは、本来、その人の中で豊かに広がり、それ自体が新しいものを生み出す力を持っているものです。そうであるのに、それを認めないで、かえって「地に隠して」気にとめない態度を主人＝神様は問題にされておられるのではないのでしょうか？

そのような態度の人に対しては、それこそ厳しく「外の暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう」と悔い改めを求められるのです。（説教より抜粋）